

昔話～こもぐち長者

昔、おじいさんとおばあさんが「菰」を作って温品に売りに行っていました。ある年、たいそう風雨に祟られ、米は不作となったが、少ない種もみで正月用の酒を作った。12月の暮れに、出雲大社に行く途中の「山」「田」「家」の3人の神様が酒を勝手に飲んだことを怒ると、3人の神様は「大判小判」「米俵」「7人の子供」に変わり、こもぐちの長者になった。

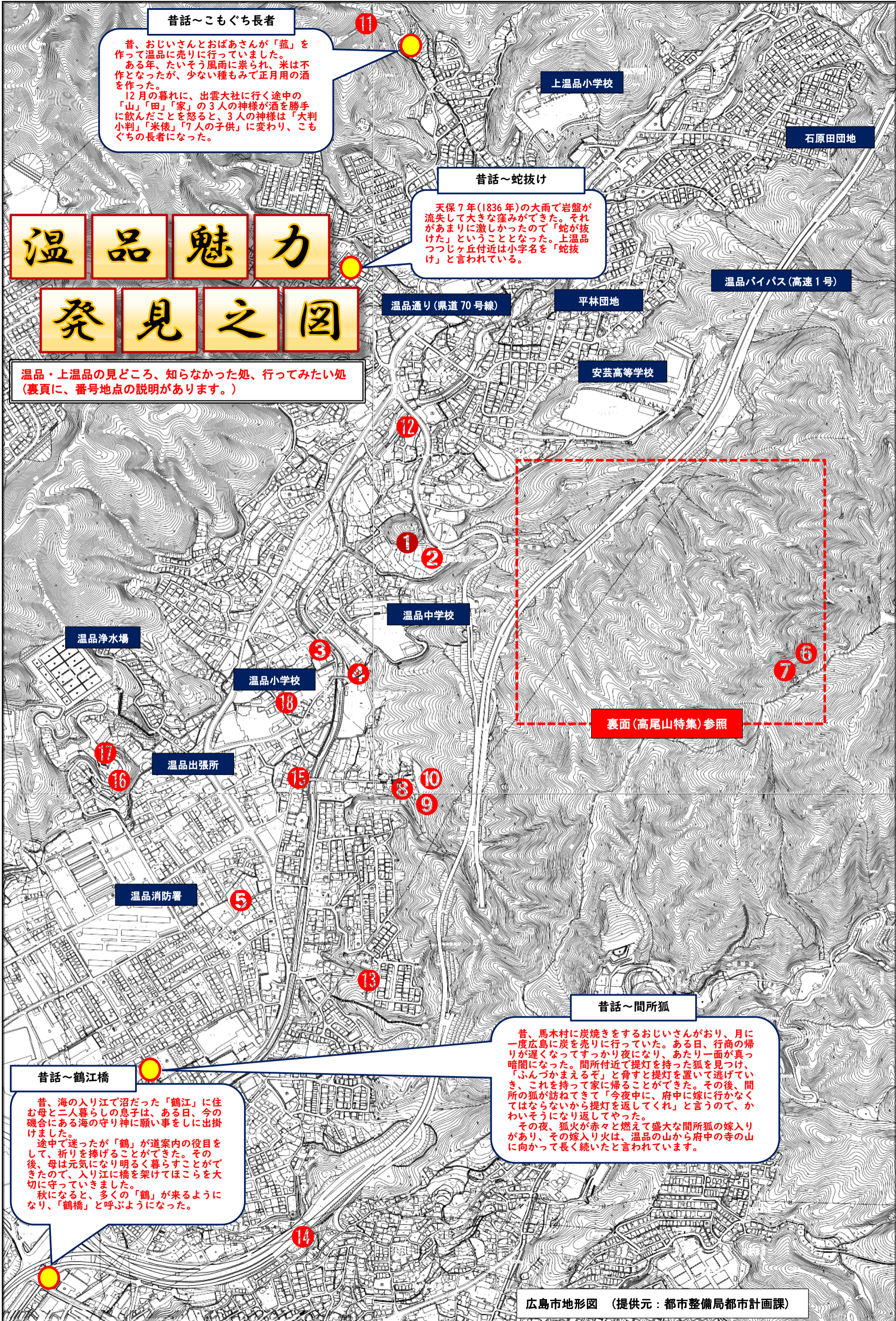
昔話～蛇抜け

天保7年(1836年)の大雨で岩盤が流失して大きな窪みができた。それがあまりに激しかったので「蛇が抜けた」ということとなった。上温品つじヶ丘付近は小字名を「蛇抜け」と言われている。

# 温品魅力

# 発見之図

温品・上温品の見どころ、知らなかった処、行ってみたい処(裏面に、番号地点の説明があります。)



裏面(高尾山特集)参照

昔話～間所狐

昔、馬木村に炭焼きをするおじいさんがおり、月に一度広島に炭を売りに行ってた。ある日、行商の帰りが遅くなってすっかり夜になり、あたり一面が真っ暗闇になった。間所付近で提灯を持った狐を見つけ、「ふんづかまえるぞ」と脅すと提灯を置いて逃げていき、これを持って家に帰ることができた。その後、間所の狐が訪ねてきて「今夜中に、府中に嫁に行かなくてはならないから提灯を返してくれ」と言うので、かわいそうになり返してやった。その夜、狐火が赤々と燃えて盛大な間所狐の嫁入りがあり、その嫁入り火は、温品の山から府中の寺の山に向かって長く続いたと言われています。

昔話～鶴江橋

昔、海の入江で沼だった「鶴江」に住む母と二人暮らしの息子は、ある日、今の機会にある海の守りに願ひ事をしに出掛けました。途中で迷ったが「鶴」が道案内の役目をして、祈りを捧げることができた。その後、母は元気になり明るく暮らすことができたので、入り江に橋を架けてほこらを大切に守っていきました。秋になると、多くの「鶴」が来るようになり、「鶴橋」と呼ぶようになった。